

平成27年度 インテリア関係 調査・研究 報告書

家庭内省エネについて KS , ICの果たす役割の検証 - VOL,3

～ インテリアとうちエコの共存 ～

JAFICAうちエコ研究会

2016年3月31日

家庭内省エネについて KS , ICの果たす役割の検証 - VOL,3 ～ インテリアとうちエコの共存 ～

目次

1、はじめに	3
2、テーマと目的	4
3、調査研究活動の概要	4
4、日本古来の住まいを実態調査	
福井研修 その1 【越前和紙講演会】	5
その2 【古民家見学】	13
その3 【和紙工房探訪】	18
その4 【うるしの里会館見学】	22
その5 【株式会社 アサノ不燃】	24
5、現代のインテリアでエコをテーマに共存できる要素	26
6、和モダンインテリア	27
7、和のエコインテリアを現代風にアレンジした空間展示	28
8、まとめ	45

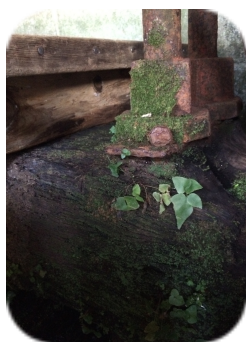
1. はじめに

2015年、このままでは地球環境温暖化に歯止めがかからないという事実が明らかになっています。そんな中、環境問題のもっとも難題「うちエコ」に取り組んで、3年目の活動となる本年は、切り口を変え、より実践的に、体感できる「美しいエコ」を実践する一年としました。

環境省認定の「うちエコ診断士」を輩出し、エコについて学びながら、IC（インテリアコーディネーター）ならではの視点でうちエコを提案していく。そのためには、ある「スタイル」を確立することの重要性に気づき、独自に「和モダンエコインテリア」なるものを提言し、その確立のために、調査、研究活動をしてきました。

「うちエコ」を家庭内に普及するために、日本の伝統のインテリアの英知を活かし、それを現代のインテリアと融合する「美しいエコ」＝「和モダンエコインテリア」スタイルの提案と、実際の空間展示により、ICのみならず一般の方々にも、「美しいエコ」についての理解を深めていただきたいと思います。

本報告書は、少しでも地球環境に貢献できることを願い、ICの私たちに何かができるかを考え活動してきた記録です。



平成28年 3月

日本フリーランスインテリアコーディネーター協会

JAFICAうちエコ研究会

片柳通行、江口恵津子、富田恵子、齋藤令子、横山玲子、
佐藤友治、西直枝、中山瑞穂、荒田芳美、近藤英子、尾崎直美

※この調査研究は、公益社団法人インテリア産業協会の助成金を受けて行いました。

2. テーマと目的

<テーマ>

家庭内省エネについて KS , ICの果たす役割の検証 - VOL,3
～ インテリアとうちエコの共存 ～

<目的>

ICがつくる美しい「うちエコ」を家庭内に普及するために

**日本伝統の美しいエコを学び、それらを活かしながらひとつの空間展示として
「和モダンエコインテリア」スタイルを一般展示する。**

現代の住まいにエコでありながら美しい暮らし＝「和モダンエコインテリア」というスタイルを提案し、実際の暮らしの一幕を出現することによって、一般的にも、ICにも、日本の伝統のしつらえと現代のうちエコが、エコを通して共存できることを実際の空間に肌で触れて感じていただくことが大きな目的です。そしてうちエコについて興味を持ち、より理解を深め、環境問題にも積極的に取り組んで頂けることを願います。

3. 調査研究活動の概要

日本古来の住まいを実態調査する。



現代のインテリアでエコをテーマに共存できる要素を考える。



和モダンエコインテリアのスタイルを確立する。



和モダンエコインテリアの空間展示をする。

4. 日本古来の住まいを実態調査

”日本の住宅は木と紙でできている”と言われてるように、障子や襖など住宅に多くの和紙が使われてきました。

そこで本年度、JAFICAうちエコ研究会では「日本の伝統のインテリア」をテーマに研究するにあたり、和のインテリアに欠かすことのできない「和紙」について研究する事となり、越前和紙の里で日本の伝統文化の宝庫である福井県の越前地方を訪ねる事となりました。

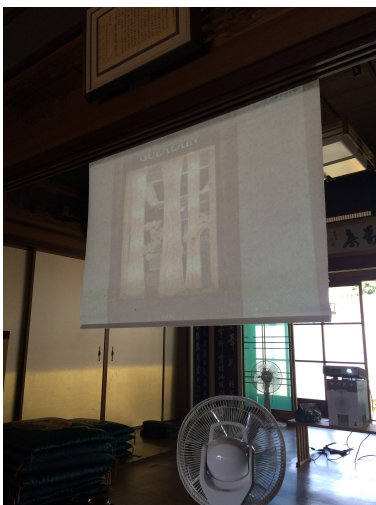
和紙以外にも、漆器などの伝統工芸品などに触れる事ができ、実りのある研修になりました。

福井研修 その1

【越前和紙講演会】

レポート：中山瑞穂、片柳通行

福井県越前市にある、江戸時代から続く紙問屋「(株)杉原商店」の和紙ソムリエである杉原吉直氏による越前和紙の講義を受講しました。



和紙のスクリーンで講義は行われました。

杉原吉直

【プロフィール】

(株)杉原商店 代表取締役 和紙ソムリエ

- 1962年 福井県越前市不老町生まれ
- 1982年 成城大学卒業
- 1986年 小津産業入社（創業350周年の和紙問屋）
- 1988年 江戸時代より続く越前紙問屋(株)杉原商店10代目として家業に就く。
- 1993年 インクジェットプリンター対応和紙「羽二重紙」を開発。
- 2000年 漆と和紙の新しい融合「漆和紙（うるわし）」がDESIGN WAVE FUKUI 大賞を受賞
- 2002年 IPEC2002 審査員奨励賞受賞
- 2004年 Salon du Meuble de Paris 2004 に出展
- 2008年 フランクフルト アンビエンテ出展
- 2009年 Paris Maison & Objet 出展
- 2010年 イタリア・ミラノサローネ出展
- 2011年 ParisとLyonで単独の和紙の展示会を開催

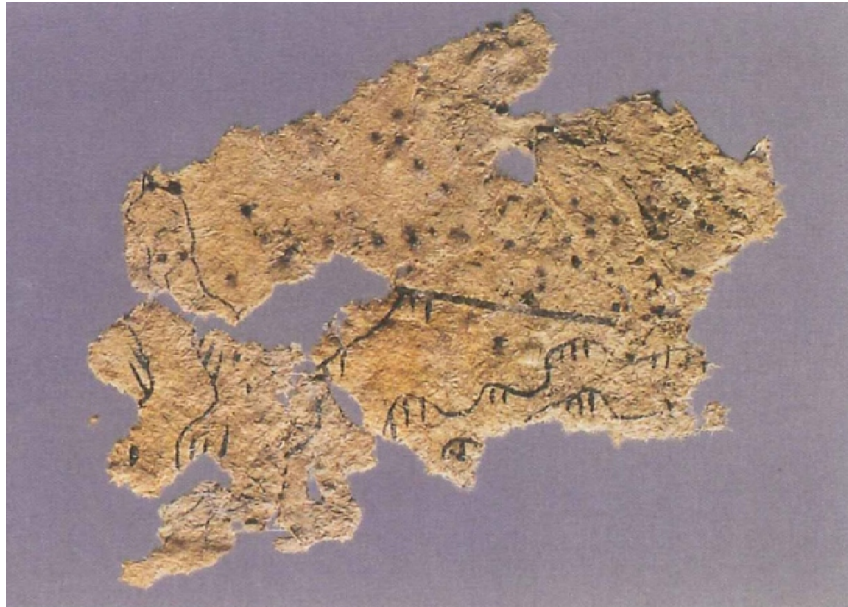
など、海外の展示会で精力的に和紙をアピールする。

そして2016年 三井ゴールデン匠賞を受賞

建築家、インテリアデザイナー向けの和紙セミナーを各地で開催中。 <http://www.washiya.com/>

紙の起源

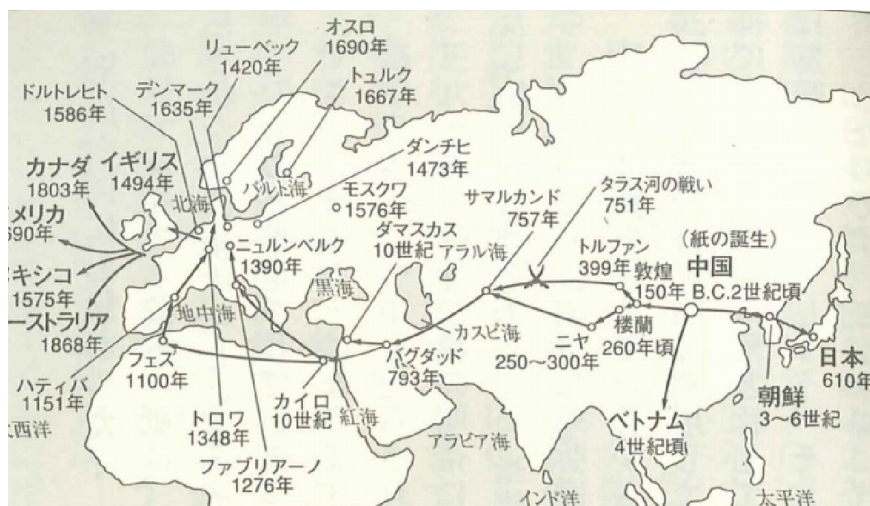
中国の2200年前の遺跡から発見されたのが、現存する世界最古の紙。前漢の文帝・景帝の時代（前180～141年）と推定される古墓から1986年に出土。墨で山や川などが描かれており世界最古の地図のひとつとされた。現在知られている最も早い時期の紙の実物で、原料は大麻。



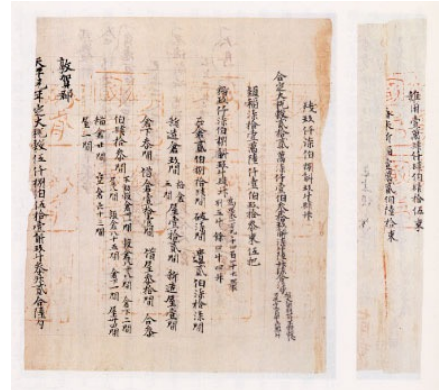
その2000年ほどあとに、蔡倫（さいりん）という中国後漢時代の宦官（かんがん）が紙の作り方を書き留めています。起源となる紙の原料は麻です。衣服や魚を捕る網に使われて、ボロボロになった麻を水槽に入れ、浮いてきたものを掬い上げたものが紙になったといわれています。

製紙技術の広がり

751年、タラスの戦いをきっかけに製紙技術が西方に伝わりましたが、紙漉きの技術の日本への伝来は、それより早い飛鳥時代の610年に高麗僧「雲徴」によって紙漉きと墨の製法が伝えられました。



発明当初、紙は戦略物資であり、その製法は国家機密として極秘扱いでした。当時の日本は推古天皇の時代、朝鮮半島と交流があり、製紙技術の伝来は国交の証とも言えるものです。正倉院の中には、730年（天平2）の年号を記した「越前国大税帳」というものが収められており、今でも染みひとつないきれいな紙が残っています。



図説 福井県史より

737年の「正倉院文書」には、紙の産地として、美作、出雲、播磨、美濃、越前などが記されています。774年「図書寮解」では、越中、越後、佐渡、丹後、長門、紀伊、近江などが加わって19カ国に増えていて、紙の生産地が広がっていったことがうかがえます。

紙とパピルス

紙の製法は長い間秘密とされてきました。ヨーロッパでは、5000年前にエジプトで発明されたパピルスが長い間、公文書用紙として使われてきました。

パピルスとは、カヤツリグサ科の植物の1種、またはその植物の地上茎の内部組織から作られる筆記媒体のことです。「紙」を意味する英語の「paper」やフランス語の「papier」などはパピルスに由来していますが、パピルス紙は、紙ではなく織物の一種です。

パピルスがあまりにも高価なので、イタリアのペルガモン国王はパーチメントを開発しました。これも紙ではなく、羊とか牛の皮をなめして石灰で洗って作られたものです。代用品として作られたパーチメントよりパピルスのほうがずっと高価で、相変わらず公文書はパピルスでした。紙の製法がドイツ、フランスに到着するのは、日本よりだいたい1000年ぐらい遅れて、今から500年前ぐらいで、ちょうどドイツでグーデンベルクが活版印刷を開発したあたりです。ヨーロッパでは、紙の材料が麻からコットンに置き換わり、コットンペーパーが作られるようになりました。

筆記具と紙の性質

紙にペンで書くと植物繊維が導管となってもものすごく滲むので、膠(にかわ)とミョウバンを溶いたものを紙の表面に塗って滲みを止めます。これをドーサ引きといいます。墨の中にも膠が入っているので、自然と滲み止めになって、日本での筆記具と紙の関係では滲み止めの必要がなかったのです。濃く擦った墨なら、いっそう滲みにくくなり、墨の濃淡でその表現方法に変化をつける事が可能になります。

しかし、西洋ではサイズ剤といって紙に水が浸透するのを防止して、水性インクの滲みを防ぐ薬品が使われます。松脂を使う方法をサイズバインとよび、漉く前の材料に混ぜておき、繊維の1本1本をコーティングしてにじまないようにします。

こうして筆記具の違いが、紙に求める特性の違いになっていきました。

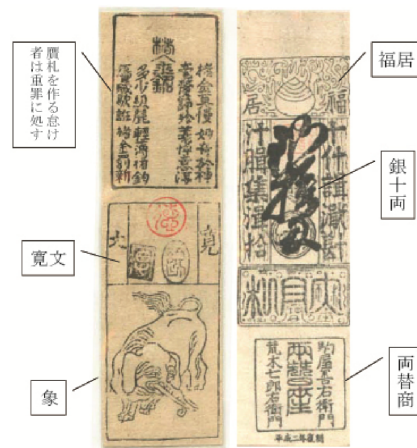
三桎(みつまた)の和紙は、繊維が短いので、万年筆でも滲まずに書くことができます。

越前和紙

平安貴族が使っていたころは、紙は貴重品でごく一部のしか使えませんでした。戦国時代になると織田信長や豊臣秀吉が紙の権利を独占するようになります。江戸時代には瓦版とか浮世絵といった、一般庶民の手に入れることができるものに普及していきました。

ただし越前は、武家の公文書として楮(こうぞ)でつくった<越前奉書>をつくっていたので、官営工場のような性格を呈していて、特別な存在だったのです。

1666年(寛文6)に越前福井藩が発行した藩札は、現存する最古の藩札とされています。この藩札の中に、透かしなどの紙漉きの技術がたくさん採用されています。



福井藩札

明治維新後に全国統一の紙幣<太政官札>が初めて発行されましたが、これも越前の和紙でした。印刷は京都で行われ、その後<日銀券>が発行された時には、越前和紙の職人さんが何人か日銀の印刷局まで行き、透かしなどの紙漉きの技術を教えています。



太政官札(だじょうかんさつ)

1900年(明治33年)のパリ万国博覧会には、三極局紙を出品して金賞を受賞しています。この和紙を出品した工場は、今でも現存しています。

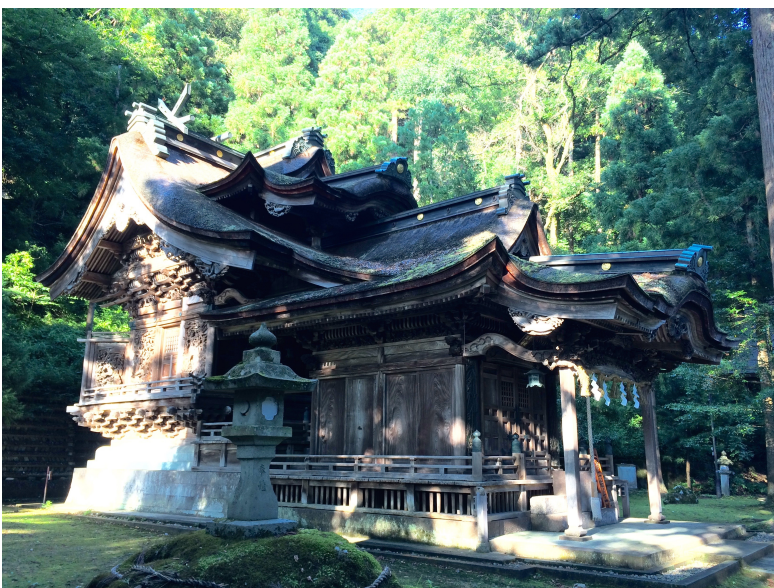


紙の神様 川上御前

越前の紙漉きの里の一番奥に、紙漉きの神様をご神体として祀った「岡太(おかもと)神社」が里宮としてあります。神社のすぐ上にあった滝のところに女の人が現れて「ここは良い水があるので紙を漉きなさい」と紙漉きを教えてくれた、この人は「この川の上流に住むものです」と答えて帰って行ったことから、川上御前と呼ばれています。この地域は傾斜地で農作物を作るには適していなかったため、以降、紙漉きによって生計を立ててきました。世界的に見ても、紙漉きの神様を祀った神社というのは、他に例を見ないようです。

33年に一度行われる大祭は、既に39回目が6年前に終わっています。単純に計算しても33年×39回+3年で1290年。大変古くから紙漉きを続けていたことがわかります。

(平成30年に1300年の周年大祭を開催予定です。)



和紙と洋紙の違い

何が和紙か、という事を規定する事は難しいのですが、国産の楮(こうぞ)、雁皮(がんぴ)、三桠(みつまた)を使って、手漉きで漉いた紙は真正正銘の和紙です。そして、越前でつくられた紙は、機械漉きであっても和紙と呼びます。機械漉きと言っても手で漉くのと同一作業を機械でやっているだけで、原理は手漉きと同様に長い繊維を絡ませてゆくため、スピードはあげられませんが、高級な機械漉き和紙になると、ゆっくり漉いた和紙を3層に重ねて1枚の紙に仕上げ、手漉きよりも性能が高い和紙を作る事も可能です。

では、洋紙と和紙の違いは何なのか？

西洋の考え方は、紙に限らないのですが、化学的に押し込めようとします。足りなければ何かを足したり塗ったりして補おうとするのです。顕微鏡で見ると、人間国宝の岩野市兵衛さんの紙は繊維が幾つも重なって、空気の間が何層にもあります。だから軽くてふわっとしています。片やコピー洋紙は、印刷性能を上げるために、何か塗られてがっちり固められています。繊維が短い方が早く紙が作れるので、洋紙ではできるだけ短く切り刻みますし、針葉樹より広葉樹のほうがより繊維を短くするので、ユーカリなどの広葉樹パルプが使われます。和紙にもパルプを使われる事があるのですが、針葉樹パルプを使うので、機械漉きの紙でも破ると長い繊維を見る事ができます。つまり繊維の強さは殺してしまって、印刷効果が高い板状のものを、いかに速くつくるか、という観点でつくられたのが洋紙だということになります。



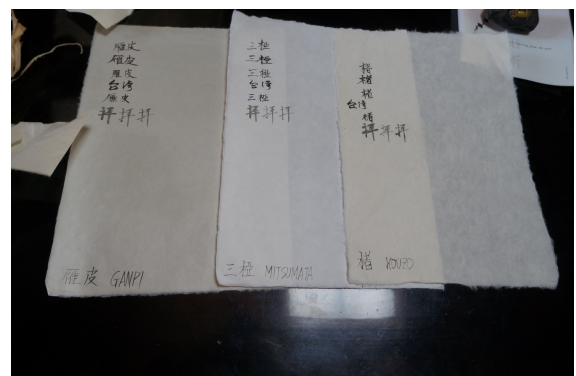
楮 (こうぞ)



雁皮 (がんぴ)



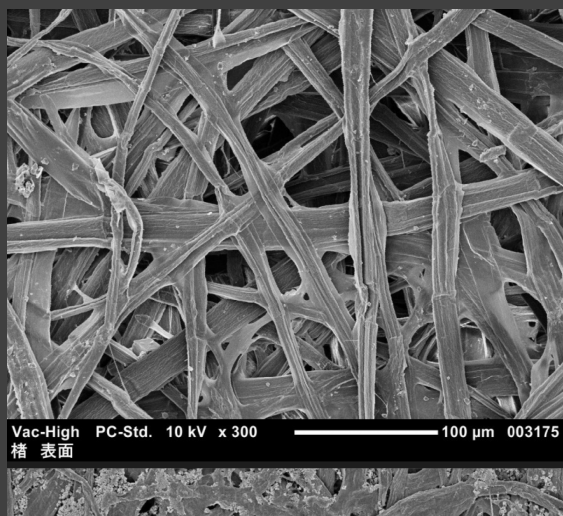
三桠 (みつまた)



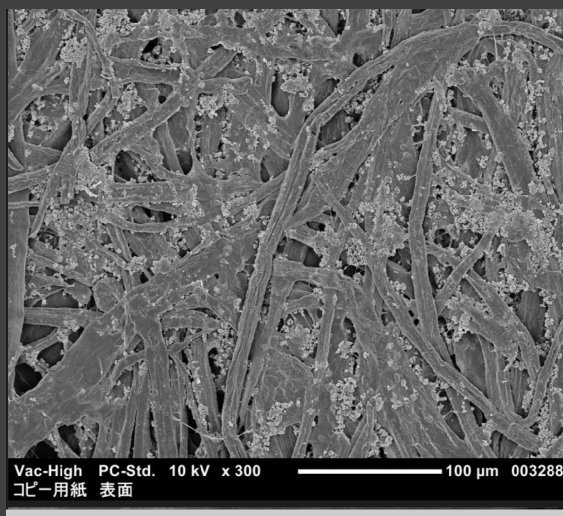
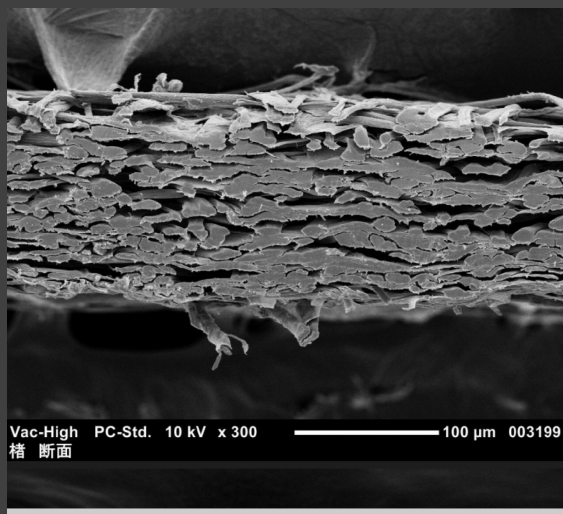
◎楮とコピー用紙の組織と断面図の比較

(左) 越前和紙の里の人間国宝、岩野市兵衛さんの漉いた紙で、楮(こうぞ)100%の奉書を、数百年前と同じ技法で現在でも紙漉きを続けておられます。繊維の絡み合いで紙になっていて、非常にシンプルな構造になっていて、ふっくらと柔らかく、丈夫です。

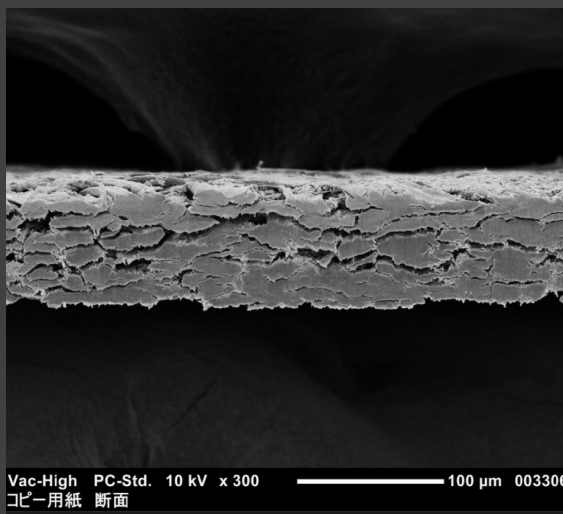
(右) オフィスで使用しているコピー用紙です。パルプの繊維とは別に、実に様々なお化粧の粉が塗られています。平滑性を出すために繊維も潰れています。



楮(こうぞ)



コピー用紙



和紙とインテリア

和紙は中国からもたらされ、飛鳥朝時代には日本国内で生産されていました。平安時代には、貴族の住居の襖や障子として用いられるようになっていきましたが、一般庶民の住宅に広まったのは江戸時代中期といわれています。和紙は昔から、日本のインテリアには無くてはならない存在でした。

(和紙の特徴)

- ・室内の湿度に合わせて吸湿、放湿を行い、室内を等湿に保つ。
和紙の繊維は長く繊維の隙間に含むことが可能であるため、室内の湿度が高い場合は吸湿し、逆に湿度が低いと空気中に水分を放出して室内の湿度を一定に保つ働きがあります。
- ・保温効果
和紙には保温効果があり、和紙の繊維の絡み合いの層のおかげで、暖房効率を高めてくれます。
- ・自然の素材を原料にしておりアレルギーの危険性がない。
基本的に和紙には、楮(こうぞ)、三桮(みつまた)、雁皮(がんび)などの自然素材のみを原料にしていますので、シックハウスの原因となるホルムアルデヒドを放出しません。そして、花粉のような微小な物質やアンモニアなどを吸着する性能もあります。
- ・燃やしても有害物質を出さない
自然素材のみを使用しているため、燃やしても有害物質が出ず、廃棄の際や火災の際に人体への悪い影響がありません。
- ・紙表面の表情が豊かである
長い繊維により、その繊維が絡み合っている表情や手触りは洋紙とは違う暖かなものとなっています。
- ・エコロジーである
育成に時間がかかる木材を主な原料としている洋紙と比較して、和紙の基本的な原料は全て畑などで短時間で作られるものばかりなので、森林資源の破壊が少なくエコロジーな素材といえます。そしてリサイクルしても、元のクオリティーと同程度の紙を作ることができます。また、作った紙が1000年の寿命があること自体、植物資源を紙という形で保管蓄積できるという意味でもエコロジーであると言えるでしょう。
- ・目に優しい
和紙は、UV加工を施さなくても、そのまま有害な紫外線をカットしてくれます。ところが、紫外線は通しませんが、可視光線は通します。従って、太陽光線のもとで読書をするより、障子の部屋で読書をするほうが、目の疲れが少なく、紫外線によって引き起こされる白内障を防ぐことができます。また、和紙は人の目に良い波長のみ通すので、和紙のシェードを使った照明器具は、目にとても優しく、目の疲れを癒すことができます。

水の文化41【和紙の表情】伝統産地の和紙ソムリエが語る「和紙の今昔物語」
「和紙屋の杉原商店」ホームページ
【越前和紙講演会】セミナー資料
より参考資料として引用いたしました。

福井研修 その2

【古民家見学】

レポート：片柳通行

講演会場となった杉原商店さんの自宅は「ふくい伝統的民家」として福井県の認定を受けています。その昔ながらの佇まいを見学させていただきました。





庇（ひさし）

大きな屋根と庇のおかげで、7月の日中でも家の中に日が差し込みません。



簾（すだれ）

西日を遮るには、簾を使います。
日が差し込まないときは、丸めて紐で縛ります。

縁側（えんがわ）

縁側は家の中と外をつなぐ中間的な空間です。
日差しをコントロールし、風の通り道を作ります。



10メートルもあろうかという鴨居や床板は繋目がなく、一枚の板で作られていました。



油団（ゆとん）

和紙でできた夏用の敷物です。
ツルツルしていて、想像以上にひんやり
しています。

蚊帳を張った夏用の建具

衣替えをするように、6月になると障子の代わりに夏用の建具を入れて暮らしを夏向きに整えます。風を通しながら虫の侵入を防ぎます。格子組も専用にデザインされていて、和紙の障子にはないイメージです。

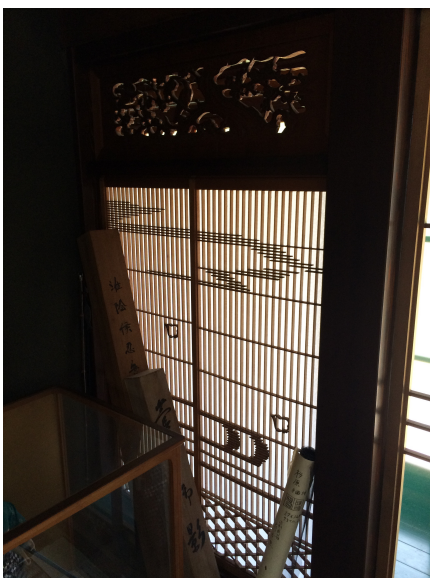


意匠性の高い襖の引手

引手は、襖を開閉する時に「手を掛ける」という実用性と上貼紙の柄を引き立て、アクセントとしての装飾的な役割も担っています。

一般的には、丸、四角、楕円のものが多く、材質は銅、真鍮、鉄、木製、プラスチック製等があります。

その中で、鶴の引手はデザイン性が高いものとなっています。



デザインされた障子

障子は細い格子組で構成され、その片面に和紙を貼ったもので、組子の組み方で印象が変わります。障子は古い歴史を持つ建具で、昔は「明り障子」と呼ばれていました。障子越しに入る光は、柔らかく、室内に独特の表情を浮かび上がらせます。材料には、日常空間では杉やサワラなどの柔らかい材を使い、格式高い空間では檜やヒバなどの堅い材を使います。最近はコストの安い米杉やスプルースなどの輸入材がよく使われるようになりました。基本的に無着色なので、材の色です。



襖がキャンバスに

襖とは、日本独特の間仕切り建具の事で、昔は「襖障子」と呼ばれていました。現在、襖は部屋の間仕切りや押入れなどの実用とインテリアを兼ねた建具として使われています。

襖縁は、襖の外回りを囲っているもので、大きく分けて「生地縁」と「塗り縁」に分けられ、生地縁が日焼けや汚れやすいのに対して、塗り縁は汚れにくく耐久性に富み、特に天然漆を使ったものが、最も優れています。

福井では、襖をキャンバスにして、大胆な絵が描かれていました。

【建具】 ～日本の建具は軽量で華奢な作り～

建具とは、建物の開口部を開閉するものの総称で、開閉の仕方により、引戸と開き戸に分けることができます。日本の建具の特徴として、鴨居と敷居に掘った溝のなかを、左右にスライドして開閉するものが多く、代表的なものとして「障子」や「襖」があります。

西洋建築における建具は、壁同様の堅牢な作りが要求されますが、日本の建築における建具は、構造的な役割はなく、軽量で華奢な作りをしています。細い格子組と和紙を面材にする事で、最軽量の建具となり、敷居の上を滑らせて開閉するためにとっても都合がよいのです。

そして、鴨居には敷居より深い溝があり、建具を持ち上げる事で簡単に外す事ができます。7月の福井では、障子の代わりに夏用の蚊帳を張った建具がおさまっていました。他にも、簾をはめ込んだ簾戸（すど）と呼ばれる建具もあり、採光と通風を同時に確保し、夏の暑さと上手に付き合う知恵が建具にも活かされています。

また、和紙を貼った襖や障子などは、吸着や調湿などの効果も期待できるため、室内環境を整える上で、積極的に取り入れていきたいインテリアエレメントの一つです。エコという観点からも、障子一枚あるだけで断熱効果が期待できるので、広い部屋を仕切る間仕切りに使ったり、窓装飾として障子を使う事で、和のイメージでエコを意識した空間作りを実現する事ができます。



唐獅子の衝立



箱階段（階段箆筥）

福井研修 その3

【和紙工房探訪】

レポート：西 直枝

越前和紙のふるさと、福井県、越前市。

昔ながらのたたずまいを残すこの町は、日本一の生産量を誇る、手すき和紙の里。

今も30軒あまりの工房で、手作業によって和紙が作られています。

7月21日(火)杉原氏に、和紙工房5ヶ所をご案内いただきました。

株式会社平野平三郎製紙所

イメージしていた和紙工房とはかなり異なった、規模の大きな製紙所で、全国的にもここまで大きい手漉きの工房は他にはないそうです。

創業は明治初期だとの事。ここでは材料の保管から、乾燥仕上げまでの工程を一貫して見る事が出来ました。

塵選りを終わったところで繊維を細かくほぐす叩解の工程などでは多少機械化された部分もありますが、工程の殆どは手作業で行われており、ご年配の方から若い方まで多くの職人さんがそれぞれの持ち場で手漉きの和紙を作っていました。

それぞれの工程の場所は別々になっていますが、いわゆる『紙漉き』の工房はとても広く、4、5カ所で2人ペアになって、襖紙位の大きさの紙を漉かれています。もっと大きい紙を漉く場合は何人もの人で漉くそうで、その時には機械で持ち上げながら漉くのだそうです。

奥には乾燥室があり、漉いたものを重ねて乾燥し、乾燥室から取り出した紙をこれも2人ペアで1枚ずつはがす工程もありました。

現在の岩野平三郎氏は三代目にあたり 1975(昭和 50)年に福井県無形民俗文化財の指定を受け、こちらの工房で漉かれた紙は平山郁夫をはじめとする多くの画家たちに愛用されているそうです。





和紙の原料



煮る



晒したもの



塵撚り



叩解



抄紙(紙漉き)



抄紙(紙漉き)



←
乾燥板に和紙を一枚ずつ貼り付ける。

人間国宝・9代目岩野市兵衛さんの工房

お尋ねすると工房では奥様がお1人で黙々と紙を漉いていらっしゃいました。ご家族が交代で漉いていらっしゃるのだとか。

主に奉書紙や版画用の紙を作られていますが、岩野さんの工房で作る奉書紙は、材料の加工などから手漉き和紙の伝統を継承していて、一切薬品等を使用せず漉き上げるのだそうです。

岩野さんの和紙は、強靱で浮世絵、版画、等に広く愛用されています。

楮の繊維の不純物である澱粉質を徹底的に洗い落とすことで、紙の強度が増し、反対に伸縮性は抑えられるという他に類を見ない和紙だという事です。

先代も人間国宝で、ピカソも先代の市兵衛さんの漉いた和紙を愛用していたそうです。

原料を取る人や道具を作る人が少なくなり、がなかなか難しくなってきたという奥様のお話でした。



山次製紙所

5、6人の方が紙すきをなさっていらっしゃる工房で、真ん中に乾燥機のシステムがあり紙をすいて乾燥機に載せ、一回りしてくると乾燥した紙が出来てくるという、紙は手漉きですが、乾燥部分を機械化して効率を高めている工房でした。

私どものため、漉いた紙に模様を付ける様子を見せて下さいましたがその方法は意外なものでした。

模様は何と手や霧吹きで水を垂らすだけ。それで素敵な模様の和紙になりました。勿論そこには熟練の技が有ってこそその事です。

それを乾燥機に載せ、あっという間に素敵な和紙ができあがりました。

後にこの模様入りの和紙をわざわざ届けて下さり、ありがたく頂戴する事に致しました。



株式会社長田製紙所

和紙工房としては大きい方なのではないかと思えます。大きなものから小さなものまで多種多様な和紙を製作されているようです。

工房には素敵な模様の和紙がいろいろ作られておりました。



社長さんのご自宅にも上げていただきましたが和紙製品をいろいろと使用されており、お母様の手になる素敵な屏風が玄関にあり、お座敷には100年位経つという油団ユダン(和紙で出来た夏用の敷物)が敷いてあり、その他照明や小物など生活の中にたくさん和紙製品が使われていました。

他にショールームとして使われているという別の戸建ての家はカーテンから小物に至るまで和紙が使われており、どれもこれも欲しくなるようなクオリティーの高い製品ばかりが展示されていました。



信洋舎製紙所

元々はかなり大きな工房だったようで趣のある建物が数棟あり、今はその一部を使ってお1人で紙漉きをされています。

伝統のある製紙所を5代目として引き継がれ、ご自身でも『フォト和紙』を開発されるのなど、意欲的に取り組んでいらっしゃる若き紙漉き職人さんでした。

福井研修 その4 【うるしの里会館見学】

レポート：富田恵子

格天井にはめ込まれた「漆絵」の鏡板

造作材は「拭漆」で加工され、格天井の鏡板には絢爛豪華な蒔絵（まきえ）や螺鈿（らでん）が施された漆絵が描かれています。

漆の黒はより深く、歴史と高い技術に魅了される空間に仕上がっています。



蝨色塗りで仕上げた漆黒のミラー

蝨色（ろいろ）は上塗りを十分に乾燥させた後、油木炭という研ぎ炭で表面を研磨する加工法です。研ぎ跡が残らなくなるまで木目の大きさの違う炭で何度も研いで完全な平面を作ります。

摺り漆を染み込ませて乾燥させた後、菜種油と鹿の角粉（津の粉）などをつけて手のひらで磨き上げることで美しい鏡面に仕上がります。

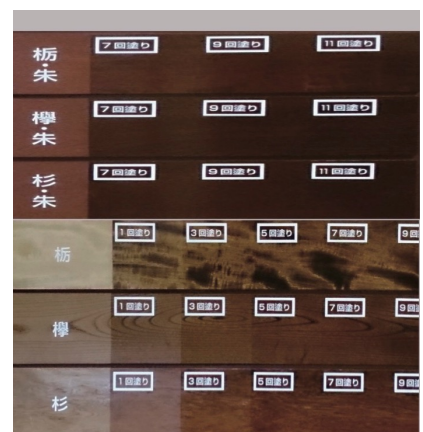
大変な手間と特別な技術が必要とした、最高峰の漆塗り仕上げです。



漆による木の化粧

漆の木から採取されたばかりの樹液は乳白色ですが、空気に触れるとすぐ褐色に変化します。生漆を布等で塗り込む事を「拭漆（ふきうるし）」といい、乾燥させてあまた拭き込むという工程を繰り返すことで艶を出す仕上げ加工のひとつです。

樹種や拭き込む回数により木目の表れ方は異なりますが、器に限らず建具や造作部分の保護と艶出しとして、漆の産地に建つ住宅等には多く見られます。



和塗師というしごと

漆器職人や漆芸家を「塗師(ぬし)」といますが、和塗師・宮森昭宏氏は越前漆器発祥の地、河和田を拠点として、伝統と高い技術を活かしながら漆の新しいアプローチに積極的に取り組んでいます。

漆器やメガネフレームとう、様々なものに蒔絵を施しながら、漆や柿渋を使用した独自の手法で、住宅の内外装や木製キッチン天板の塗装なども請け負っています。



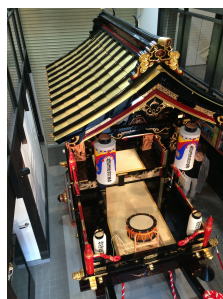
越前で見えた漆器以外の漆の活用

海外で漆は”JAPAN”とよばれる程広く認知されています。普段使いの器から美術品まで、馴染深い日本の代表的な工芸品ではありますが、本来『漆』とは、ウルシオールを主成分とする天然の樹脂塗料。耐水性をはじめ、一旦硬化した漆は酸やアルカリ、アルコール等に耐える性質を持ち、耐熱性も有しています。

生活のあらゆる場面において、塗料として漆を活用することが可能であり、実際多くの漆器産地では昔から住宅建材に漆を塗布した仕上げが施されていました。柱や長押、鴨居等の和室造作材に「拭漆」という手法で透けた生漆を何度も塗り込み、木目を生かしながら防腐・防湿・材料を強化する…このちいきの古くからある家屋を訪ねれば大抵見ることのできる、一般的なインテリアの仕上げ材料です。

三方を山に囲まれ、木材や上質な漆が手に入りやすい恵まれた環境にあり、何より漆塗り職人が数多く存在した地域に限られる特

徴ではありますが、今後私たちが環境を意識した室内空間をデザインする上で「漆」はその効果と自然な風合い＝経年変化を楽しむことのできる「美しいインテリア材料」であることを再認識し、幅広く活用できる可能性を実感しました。



福井研修 その5

【株式会社 アサノ不燃】

レポート：江口恵津子

VISIONが「新たな価値の創造を通して社会貢献」というのにまず惹かれます。福井の方々には想像力に満ちて、行動力があります。こちらの浅野社長もバイタリティー溢れる方でした。

我々うちエコ研究会が勉強すべきは「安心安全に美しいインテリアを維持する」にあり、まさに開発商品「スサノヲ」はこれからの提案の付加価値になるものです。



【1】不燃材料「スサノヲ」のデザインは豊富

縄文（荒材加工）、弥生（古材加工）、飛鳥（洗い出し加工）など、ネーミングにもこだわりがあり、トレンドの「エイジング」デザインをいち早く取り入れています。



加工、塗装バリエーションも豊富

【2】「木格子」にするとインテリアではより一層映えてきます。



【3】「木ぬり壁」「和紙」もあります。



【4】まとめ

「うちエコ」の考えの一つに、大切なものを長く継承するということがあります。このセルフネンという不燃技術は、デザインも豊富でかつ、安心安全に守られるということです。インテリアコーディネーターにとっても「うちエコ」+「不燃」の付加価値が付けられれば、ご提案は多種多様に広がっていくように感じます。

5. 現代のインテリアでエコをテーマに共存できる要素

日本古来のエコインテリア

日本古来の住まいの中で、当然のようにしてきたエコな工夫を、現代に合わせた形にアレンジしインテリアに取り込むことで、エネルギーに依存しない家庭内省エネを実現させるものである。

<夏基準>

古くから日本の住宅は「家の作りようは、夏を旨とすべし」（吉田兼好の「徒然草」第55段の一節）とする考えが一般的に浸透していたようで、冷やす技術がない時代では、夏を基準としていたのは当然のことだと言える。

しかし、地域によってその基準は様々で、白川郷で有名な合掌造りの家の作りは、重い雪を想定したいわゆる「冬を旨とすべし」とした冬を基準とした家の作りである。

今回訪れた福井の古民家は、季節が夏であったこともあり、夏仕様の古民家であったので、夏基準のインテリアの工夫を調査研究することとなった。

<日射しを遮る>

暑い夏を快適に過ごすためにはまず、強い日射しを遮ることが必要になる。

日本の住宅の特徴として、雨傘のような大きな屋根があげられるが、庇と合わせて雨から家を守るだけでなく、夏の強い日射しを遮ってくれる役割も担っている。

玄関などの土間や縁側などの「屋内にありながら、外とのつながりのある空間」が、居室をより奥へと場所を移すことになるので、薄暗い印象があるのはそのためであるとも言えよう。

つまり、夏の日射を居室に届かせない工夫がされているのであ

<風を通す>

縁側の窓を解き放すと、立派な庭園が広がっている。縁側は家の中と外をつなぐ中間的な空間である。その縁側の部分で、ある程度の日射しから受ける熱は緩和される。そしてその奥に障子で仕切られた居室が存在する。訪れた古民家は、夏仕様の建具として「蚊帳」のはった障子が取められていた。虫の侵入を防ぎながら風を通す工夫である。南側だけでなく奥の部屋のふすまを開けると反対側にも同じように夏用の建具と縁側が存在していて、風が心地よく通っていった。

風を通すための工夫としては、夏用の建具と、まっすぐ風が通り抜ける間取りにあることがわかる。

<湿度を抑える>

夏を快適に過ごすために最も重要なのが湿度を下げることだ。

湿度が低ければ、人間自身が持つ発汗作用により体温を維持することができるが、湿度が高く高温の中で人間は、自身の持つ発汗作用だけでは体温を維持することができなくなる。そうなると、強制的に風を当てるか、氷や水などで直接冷やさなければ居られなくなり、とても不快に感じるようになる。風を通して湿気を追い出すことも必要だが、日本古来の建物は、家そのものがその素材により調湿効果を持っている。壁の漆喰、床に敷いた畳、そして建具に貼った和紙である。それらが風通しの良い家のインテリアエレメントとして調湿効果を発揮して、快適な室内を作っているのである。

6. 和モダンエコインテリア

<日射しを遮る>

現代の日本の住宅で、大きな屋根に大きな庇を装備することは、土地の広さや建物のデザインを考えるとなかなか難しい事と言える。そうすると、縁側のような室内の中にありながら外のように使う事ができる空間を作る事が、日射しを遮るための有効な方法ではないだろうか。

家のデザインにもよるが、リビングの床がそのまま外のデッキにつながっているようなインテリアであったり、家の中に土間を作り、居室を日の当たらないところに配置するようにすれば日射しを遮る事ができるのである。土間や縁側のような空間では、例えば近所のちょっとした来客を家に上げる事をせずに、でも屋内で接客できるといったメリットや、土や水分を土間に落とす事で室内に持ち込まないなどのメリットがある。ペットと暮らしているお宅や、アウトドアな趣味があるお宅などはメリットが大きい。

冬場の部屋の冷え込みや家の中に段差が生じてしまうなどのデメリットも考えなくてはならない。

<風を通す>

現代社会で、日本が昔から変わった事として治安の悪化があげられるだろう。

海外に比べるとまだまだ安全な社会ではあるが、防犯の意識を全くしないわけにはいかない。

蒸し暑い熱帯夜のように、窓を開け放した状態で睡眠につく事は難しい事だ。

特に高齢者は、エアコンの風を嫌がる傾向にあるため、風を通す工夫が必要であろう。

風を通すための方法として、入口と出口に高低差を付ける方法がある。空気は暖かいと上に流れていき、冷たい空気は下に流れる。この事を利用して、空気の入口は低い位置に、出口は高い位置に作る事で自然に空気が流れ風が通るようになる。日本には古来から、地窓という低い位置に窓を配置する方法があるので、反対側に高窓を設置する事でかぜを通す事が可能となる。防犯の事も考えた上で風を通す工夫をするべきだと考える。

<湿度を抑える>

高気密・高断熱な現代の住宅で、エネルギーに依存しないで湿度を下げる事は、とても難しい事だと考える。いくら風通しを良くしようと工夫しても、洗面室やトイレや浴室の換気扇を止めることはできないからである。ビニールクロスの壁やメラミン樹脂の建具では湿度を下げる事はできない。換気扇で追い出すしか方法がないのである。やはりここでは、漆喰や和紙や畳などの自然素材を皆すべきだと考える。

無垢材の使用も、その肌触りや調湿効果を考えると造作部分に積極的に使っていくべきだと考える。

まとめ

家に求める性能は、今も昔も日本の気候や風土に合わせて考えられたものであった。

特に夏基準で考えると、単純に「日射しを遮り」「風を通し」「湿度を抑える」の三点に絞られる事である。要するに、カビの発生を抑え、健康で長く生きられる家を求めているという事である。

我々日本人は、そのための工夫をエネルギーに依存しない時代から考え、作り上げてきたのである。エネルギーを上手に使う事がエコな暮らし方ではあるが、究極は、エネルギーを使わずに自然と共生する事だと考える。それは、先人たちが行ってきた事であり、不可能ではないからだ。このままでは、地球温暖化に歯止めがかからないという事が明らかになった今こそ、先人たちの知恵をインテリアに生かすべきだと考える。

7. 和のエコインテリアを現代風にアレンジした空間展示

「和モダンエコインテリア」を研究レポートだけでは終わらせず、実際に建物空間として存在させることにしました。エコな美しい住まいを暮らしのひとコマとして感じていただき、和モダンエコインテリアについての興味や理解を、一般の方々、IC（インテリアコーディネーター）の方々に深めていただくことを目的として実施いたしました。

◎コンセプト：「和モダンエコインテリア」

- ・縁側や土間のような内でも外でもない空間 → 日射、雨、湿気、を室内に入れない工夫。
- ・畳屋和紙の建具で、調湿効果の高い空間 → 湿度を抑える工夫。
- ・風通しの良い空間 → 湿気がこもらない工夫。
- ・人が集う空間 → エネルギーの分散を防ぐ工夫。

◎テーマ： ～夕暮れどきのお習字教室～

エコな豊かさを表現する展示空間

- ・子供たちの真剣な眼差し
- ・近所のおとなたちの井戸端会議
- ・懐かしいけど新しい場所

3m四方の空間を、和紙、畳、土間などで構成し、夕暮れどきの地域の心温まる懐かしい風景を表現。心も体もエコな空間を感じていただく。

- ①スマホから解放される空間。
- ②書道で、自分に向き合う子供達。凛とした先生。
和紙の美しいデザイン、灯り、風、畳の肌触り、
枝振りの良い花器、墨の香り。
- ③温かく見守る地域の大人たち。
漆器、夕涼みの縁側、座布団、虫の音



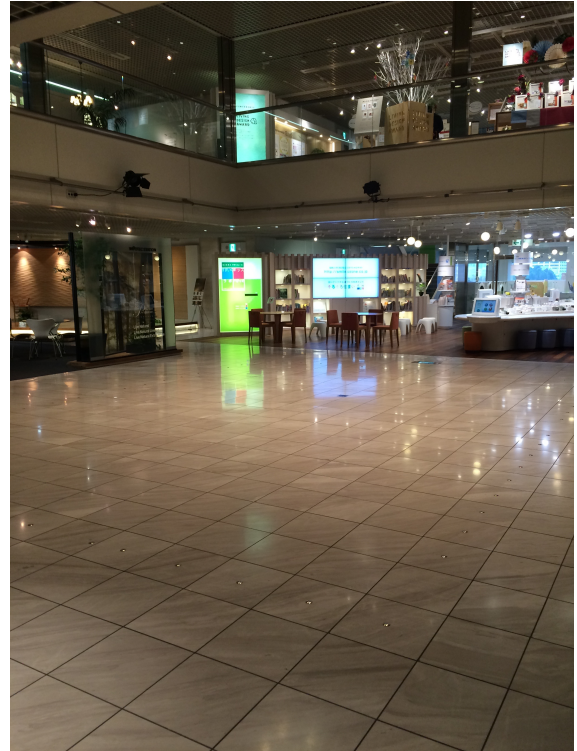
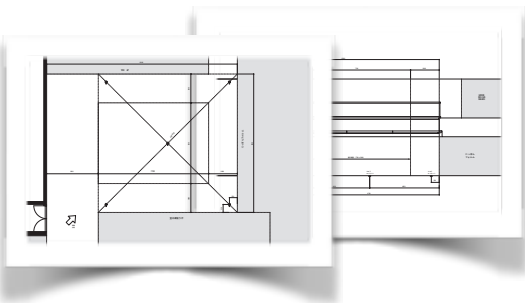
企画初期段階でのイメージアクソメ図

◎展示会場

① LIVING DESIGN CENTER OZONE (パークサイドスクエア)

以前から、OZONE様と共催イベントの企画を検討中でしたので、今回の空間展示とうちエコ診断&連動セミナーを実施させていただく事になりました。

展示場所として用意していただいた会場は、OZONEの6F「パークサイドスクエア」で吹き抜けの空間です。店舗が隣接しているので、邪魔にならず、しかし閑散としない展示を要望されました。



OZONE様より図面を頂き、企画検討しました。

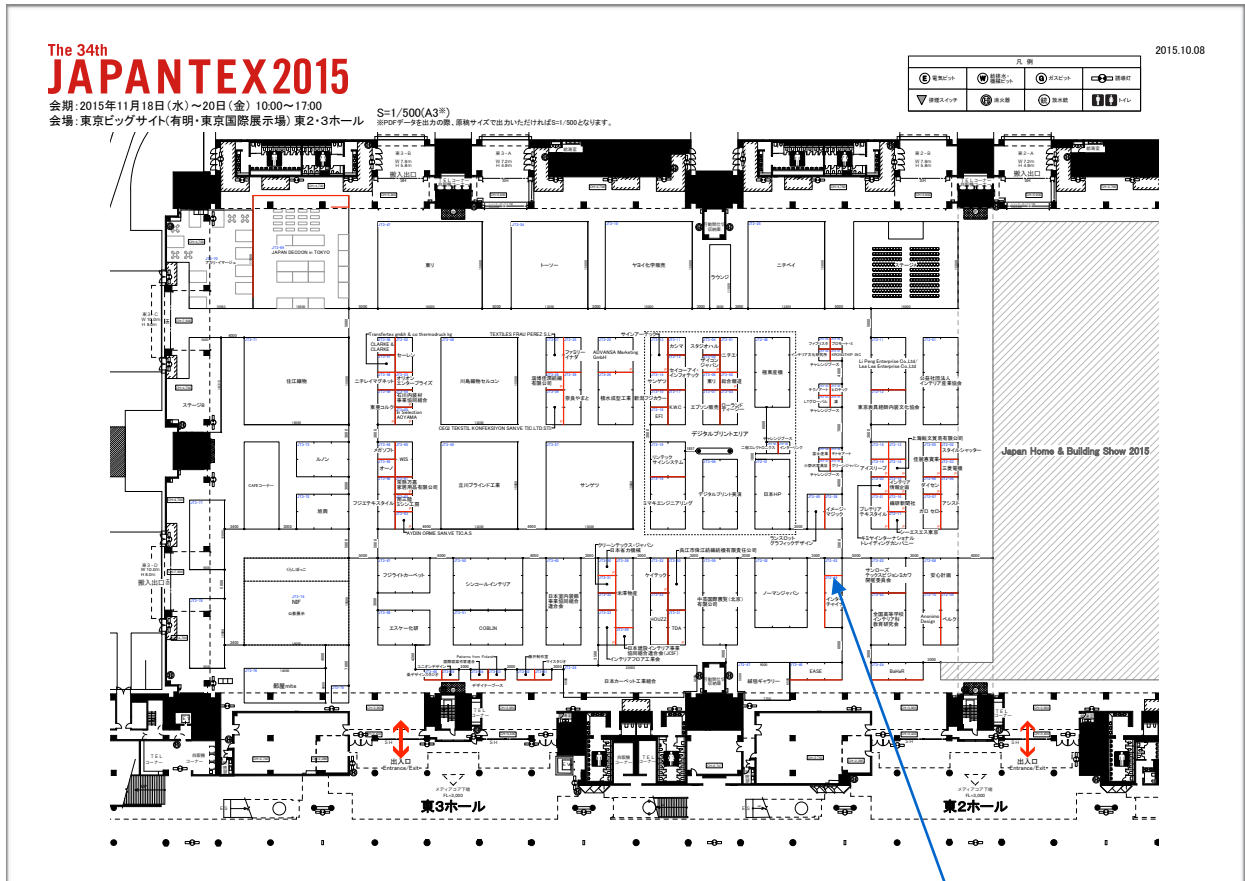
【ポイント】

- ・ 3方向に店舗が隣接しているので、動線や視線を考る。
- ・ 平面で4方向から見られ、吹き抜で上階からも見られるため、全方向を意識する。
- ・ 同時に実施するうちエコ診断のコーナーを設ける。
- ・ 予算が少ないので、展示品をOZONE内のショップ様にお借りするなどの工夫が必要。
又は、企業様にご協力をお願いする。
- ・ 福井研修の成果をパネル展示するための展示方法を考る。(壁面がないため)
- ・ 空間展示の製作を外注する費用がないので、自分たちで製作する方法を考る。

- ・ JAPANTEXでも同じ展示を実施したい。

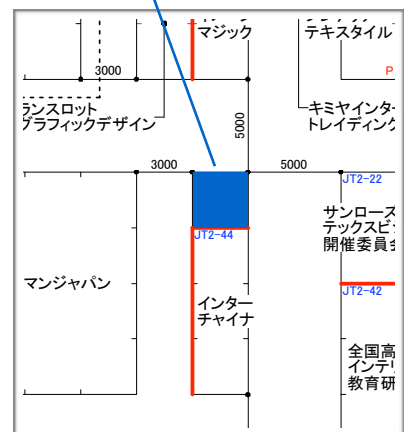
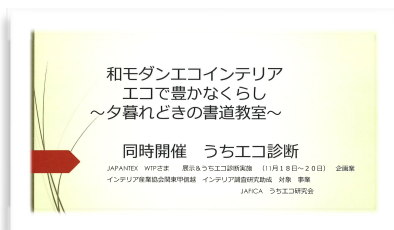
② JAPANTEX2015 WTPブース

OZONE様以外にも、WTP（ウインドウトリートメントプロジェクト）様からもご協力のお話を頂き、JAPANTEX2016に空間展示を実施させていただく事になりました。



【ポイント】

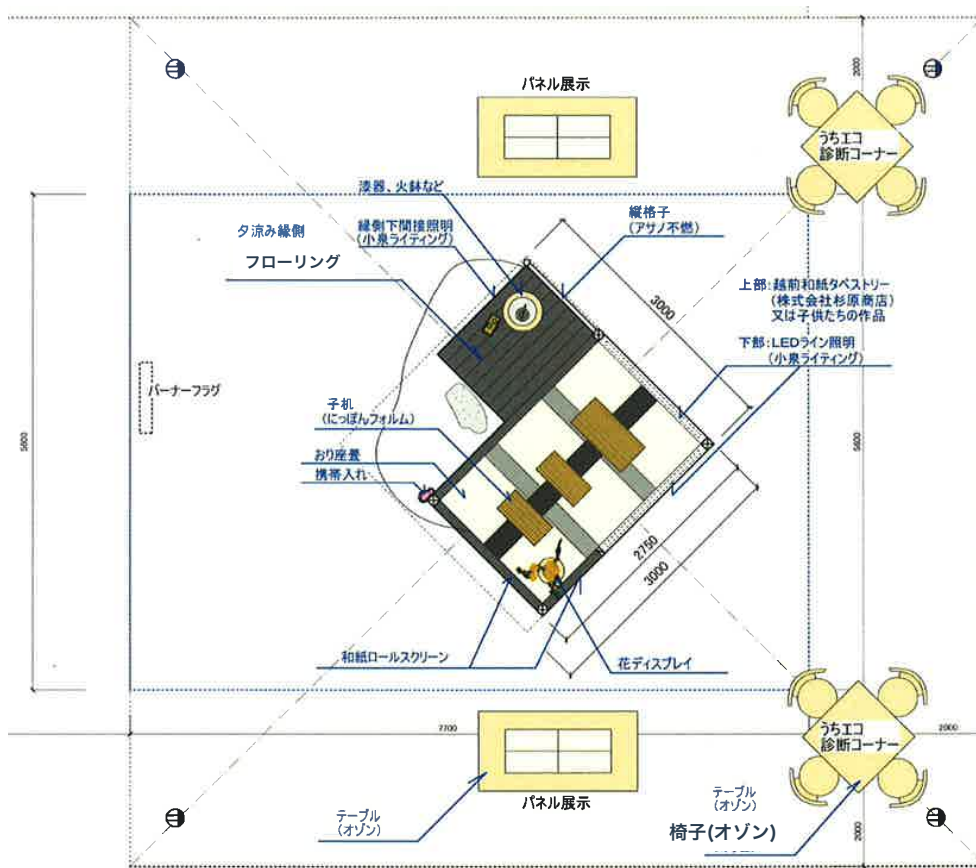
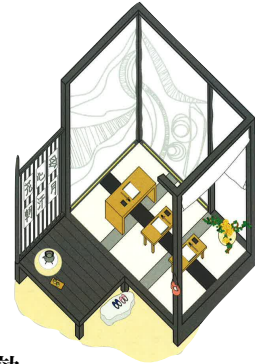
- ・ **3m×3m**のスペースに収まる展示空間を製作する。
- ・ 組み立て、撤去が容易である事。
- ・ うちエコ診断を実施するスペースを考える。
- ・ 電源を確保する。



◎展示内容

①空間展示： ～夕暮れどきのお習字教室～

- ・ 1000年もつと言われる手漉き和紙をインテリアに使用。
→ 障子や襖以外で和紙の可能性。
- ・ 畳の心地よさを人工畳で再現する。
→ メンテナンス性、デザイン性を向上させ、アレルギーに対しても有効。
- ・ 色彩により和のインテリアのイメージにするために塗装を施す。
→ 木材を塗膜で保護し、耐久性を向上させる。調湿や浄化機能のある塗装もある。
- ・ 和の空間にもマッチするハニカムスクリーンを使用。
→ 美しさと機能性も備えた窓総称で、窓まわりのエネルギーの出入りを防ぐ。
- ・ 人が集う空間づくり。
→ 個室使用によるエネルギーの分散を防ぐ。
- ・ 代々継がれ、修復しながら長く使うことのできる漆器を展示。
→ 豊富なデザインによる漆器の可能性。



OZONE会場 レイアウト



3DCGによる完成イメージ：中山瑞穂

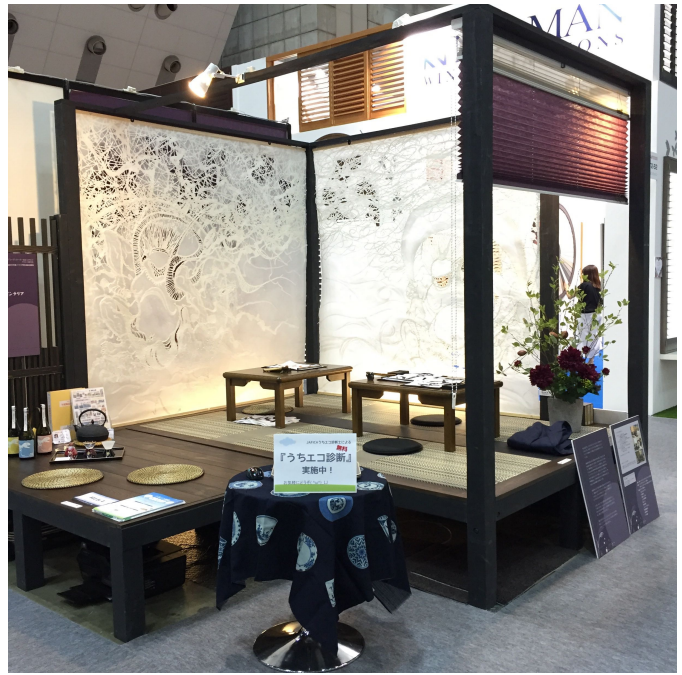
【展示協力】

- ・和紙のタペストリー 2枚製作・・・株式会社 杉原商店様 <http://www.washiya.com>
- ・書道道具・作品 レンタル・・・葉奈書道教室
- ・人工畳（おり座） レンタル・・・島田哲夫様
- ・間接照明器具 2本 レンタル・・・コイズミ照明 株式会社 <http://www.koizumi-lt.co.jp>
- ・スクリーン 1本提供・・・株式会社 サンゲツ <https://www.sangetsu.co.jp>
- ・塗料 つや消し(黒) 1缶提供・・・関西ペイント 株式会社 <http://www.kansai.co.jp>
- ・漆器（トリチュラ）レンタル・・・山嘉商店 株式会社 <http://www.tritura.biz/>
- ・木格子 レンタル・・・株式会社 アサノ不燃 <http://funen.jp/wp/>
- ・座卓（大）1台レンタル・・・TAIYOU no SHITA <http://taiyounoshita.jp>
- ・座卓（小）2台レンタル・・・ゆき工房
- ・椅子 4台レンタル・・・ノルディックフォルム <http://www.ozone.co.jp/nordicform/>

順不同



OZONE空間展示



JAPANTEX2015空間展示



越前和紙「風神雷神」



デザイン漆器「Tri Tura」



間接照明器具「コイズミ照明」



座卓「TAIYOU no SHITA」 「ゆき工房」



木格子「アサノ不燃」



スクリーン「サンゲツ」

②パネル展示：和モダンエコインテリア

福井研修のレポートを元に、展示用のパネルを製作しました。



家には図らずも、そこに住まう人の「人となり」が反映されているものです。外観やインテリアを、自分の趣味に合うようコーディネートする事は、今では誰もが行う自己表現のひとつとなっています。

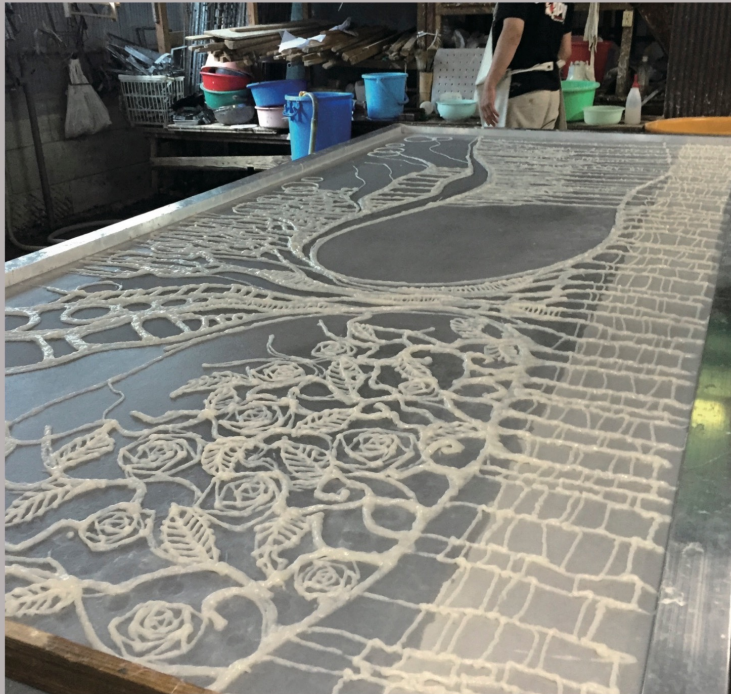
高度経済成長と住宅の大量供給の時代を経て、1980年代に「愛着が高まる個性にあった住まい」が求められるようになりました。多種多様なインテリアエレメントが生産され、それらを上手くまとめる為の専門的な知識と技術を習得した職能者である「インテリアコーディネーター」が誕生したのもこの頃です。JAFICAも設立から25年、成熟したインテリア業界の中で、専門的職能者としての基本を保ちながら「持続可能な社会」を目指した活動に積極的に取り組んでいます。

環境負荷の少ない製品を提案する事は言うまでもありませんが、愛着ある住まいでサステナブルな暮らし方を継続していくためには、住まい手の感性に合う「美しさ」が兼備されていなくてはならないと私たちは考えています。

この夏、JAFICA うちエコ研究会は皆で福井を訪ねました。そこで私たちが見たものは、古くから伝わる伝統産業と、そこで培われた生活の知恵の数々・・・夏の暑さをさらりと受け流す、美しい暮らし方に魅了させられました。

福井での学びと共に、エコロジカルなライフスタイルの実現に向けて、インテリアコーディネーターである私たちが提案する「エコインテリア」を是非ご覧下さい。

福井で見つけた和モダンエコ / 和紙 ①



越前和紙の里 紙漉き工房探訪

『日本の住宅は木と紙で出来ている』と言われるように、障子や襖など住宅に多くの和紙が使われてきました。和紙の主原料である楮、三椏、雁皮等は成長が早く自然林をこわす事がなく、製造工程で化学薬品を使うこともありません。リサイクルもし易く、1000年以上持つとも言われるくらい保存性が良い和紙は大変エコな素材であり、和紙の持つ暖かみのある独特の風合いは癒しを与えてくれます。そこで本研究会は『和のインテリア』に欠かせない和紙を求めて、1500年前から伝わる、越前和紙の紙漉き工房を訪ねました。越前で製造される、和紙は主に小間紙、奉書紙、檀紙、証券紙、画仙紙などがあり、特に奉書や鳥の子は高い評価を得ています。今回訪問した和紙工房は、

- ・(株)平野平三郎製紙所
- ・9代目岩野市兵衛氏(人間国宝)
- ・山次製紙所
- ・(株)長田製紙所
- ・信洋舎製紙所

の5カ所です。大きな工房からお一人で紙を漉いている所と規模は様々で、製作されている和紙も伝統を脈々と守っている所から意欲的に新しい試みや製品を作っている所と様々で、大変勉強になりました。

(レポート/西 直枝)

【紙漉きの工程】

- ① 水浸け
- ② 煮る
- ③ 灰汁出し・晒し
- ④ 塵選り
- ⑤ 叩解(こうかい)
- ⑥ 抄紙(紙漉き)
- ⑦ 圧搾・乾燥
- ⑧ 仕上げ

④ 塵選り
丁寧にちりを取り除く



⑥ 紙漉き



漉いたあとで模様付け



⑦ 圧搾・乾燥後、
1枚1枚丁寧に剥がして
いく作業。



福井で見つけた和モダンエコ / 和紙 ②

夏の涼を感じる『油団(ゆとん)』

「柱影 映りもぞする 油団かな」とは高浜虚子が詠んだ句です。油団が夏の季語とされている程、夏の暑さをし凌ぐために昔から使われていた敷物であることがわかります。かつては全国で作られていましたが、今では鯖江市内にある表具店・紅屋紅葉陽堂ただ1軒となり、毎年1〜3枚の注文に応えているそうです。杉原家の油団もつるつるとして、まるで使い込んだ鞣し皮のよう。柱影も映すほど光沢ある表面に触れると、想像以上のひんやりとした感覚に驚きます。これはファブリックの敷物では味わえない触感です。そしてその製作工程には驚く程の手間がかけられています。

まず生麩糊で鳥の子和紙を貼り合わせ、目的の大きさに継ぎ貼りをしていきます。さらに15枚ほどの和紙をシュロの固い刷毛で叩きながら重ねて1枚に繋いでいきます。この「打ち刷毛」という作業は3人でひと月以上繰り返されます。このあと裏面に柿渋を塗り(漆塗りの場合もある)、表面に熟した荏胡麻油を布で2回手塗りし、屋根で天日干し。仕上げは潰した豆腐を木綿の布で摺り込み、乾いた布で磨き上げてようやく完成となります。価格は1畳あたり10万円位ですが、その値段に見合うほど長く使うことが可能です。使い込む程艶色に変化し、水分も染み込みにくくなる油団は、良質な和紙の産地であるこの越前だからこそ、その技術の継承が可能であったと理解できます。

畳の上に敷くだけで、五感に涼しさを与えることのできる油団こそ、美しさとエコロジカルを兼ね備えた日本の代表的な夏のエレメントだと言えるでしょう。

(レポート / 富田恵子)



和紙のカーテン

風を孕んだ和紙のカーテンは、室内に心地よいゆらぎをもたらしてくれます。



和紙シェードのフロアスタンド・うちわ

独特な手法で作られた芸術的な和紙のシリーズ。技術力の高さと職人の優れた感性、そして杉原商店のプロデュース力で国内外のデザイナーから引っぱりだこの製品です。



福井で見つけた和モダンエコ / 建具



蚊帳を張った夏用建具

衣替えをするように、6月になると障子と夏用の建具を入れ替えて、暮らしを夏向きに整えます。風を通しながら虫の侵入を防ぎ、専用にデザインされた格子組は和紙の障子とはひと味違う空間を演出しています。

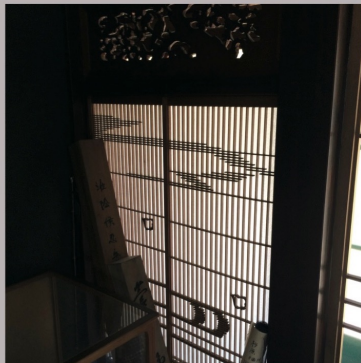
日本の建具は軽量で華奢なつくり

建具とは、建物の開口部を開閉するものの総称で、開閉の仕方により、引戸と開き戸に分けることができます。日本の建具の特徴として、鴨居と敷居に掘った溝の中を、左右にスライドして開閉するものが多く、代表的なものに「障子」や「襖」があります。西洋建築における建具は、壁同様の堅牢な作りが要求されますが、日本の建築における建具は、構造的な役割はなく、比較的軽量で華奢な作りをしています。細い格子組と和紙を面材にすることで最軽量の建具となり、敷居の上を滑らせて開閉するためにとっても都合がよいのです。鴨居には敷居より深い溝があり、建具を持ち上げることで簡単に外す事ができます。7月の福井では、障子の代わりに夏用の蚊帳を張った建具が納まっていた。他にも簾をはめ込んだ簾戸（すだ）と呼ばれる建具もあり、採光と通風を同時に確保し、夏の暑さと上手に付き合う知恵が建具にも活かされています。また、和紙を貼った襖や障子などは、吸着や調湿などの効果も期待できるため、室内環境を整える上で、積極的に取り入れていきたいインテリアエレメントの一つです。エコの観点からも、障子一枚あるだけで断熱効果が期待でき、広い部屋の間仕切りと、和のイメージでエコを意識した空間作りを実現する事ができます。(レポート/片柳通行)



意匠性の高い襖の引手

引手は、襖を開閉する時に「手を掛ける」という実用性と上貼紙の柄を引き立て、アクセントとしての装飾的な役割も担っています。一般的には、丸、四角、楕円のものも多く、材質は銅、真鍮、鉄、木製、プラスチック製等があります。このような「鶴」をモチーフにした引手金物から、家主のインテリアに対するこだわりを感じることができます。



デザインされた障子

障子は細い格子組で構成され、その片面に和紙を貼ったもので、組子の組み方で印象が変わります。昔は「明り障子」とも呼ばれていました。障子越しに入る光は、柔らかく、室内に独特の表情をもたらします。一般的に杉やサワラなどの柔らかい材を使い、格式高い空間では檜やヒバ等堅い材が使われます。近年は安価な米杉やスプルース等の輸入材が多く使われています。基本的に無着色なので、材の色です。



襖がキャンバスに

襖とは、日本独特の間仕切り建具であり、昔は「襖障子」と呼ばれていました。襖縁とは襖の外回りを囲っているもので、大きく分けて「生地縁」と「塗り縁」に分類され、生地縁が日焼けや汚れやすいのに対して、塗り縁は汚れにくく耐久性に富み、特に天然漆を使ったものが最高級品といわれています。襖をキャンバスに見立て、大胆な図柄が描かれた建具はもはやアートとして空間を引き締めています。

福井で見つけた和モダンエコ / 漆



格天井にはめ込まれた「漆絵」の鏡板

造作材は「拭漆」で加工され、格天井の鏡板には絢爛豪華な蒔絵や螺鈿が施された漆絵が描かれています。漆の黒はより深く、歴史と高い技術に魅了される空間に仕上がっています。

(うるしの里会館内・和室／鯖江市)

越前で見た漆器以外の漆の活用

海外で漆は「JAPAN」とよばれる程広く認知されています。普段使いの器から美術品まで、馴染深い日本の代表的な工芸品ではありますが、本来「漆」とは、ウルシオールを主成分とする天然の樹脂塗料。耐水性をはじめ、一旦硬化した漆は酸やアルカリ、アルコール等に耐える性質を持ち、耐熱性も有しています。生活のあらゆる場面において、塗料として漆を活用することが可能であり、実際多くの漆器産地では昔から住宅建材に漆を塗布した仕上げが施されていました。柱や長押、鴨居等の和室造作材に「拭漆」という手法で透けた生漆を何度も塗りこみ、木目を生かしながら防腐・防湿・材料を強化する……この地域の古くからある家屋を訪ねれば大抵見ることのできる、一般的なインテリアの仕上げ材料です。

三方を山に囲まれ、木材や上質な漆が手に入りやすい恵まれた環境にあり、何より漆塗り職人が数多く存在した地域に限られる特徴ではありますが、今後私たちが環境を意識した室内空間をデザインする上で、「漆」はその効果と自然な風合い＝経年変化を楽しむことのできる「美しいインテリア材料」であることを再認識し、幅広く活用できる可能性を実感しました。

(レポート／富田恵子)



漆による木の化粧

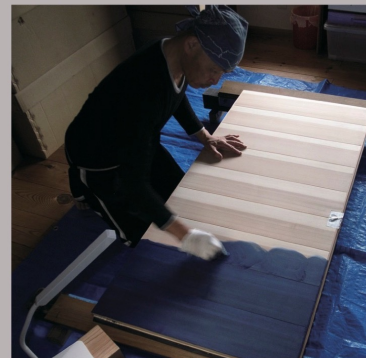
漆の木から採取されたばかりの樹液は乳白色ですが、空気に触れるとすぐ褐色に変化します。生漆を布等で塗り込む事を「拭漆」(ふきうるし)といい、乾燥させてはまた拭き込むという工程を繰り返すことで艶を出す仕上げ加工のひとつです。

樹種や拭き込む回数により木目の表れ方は違いますが、器に限らず建具や造作部分の保護と艶出しとして、漆の産地に建つ住宅等には多く見られます。



蠟色塗りで仕上げた漆黒のミラー

蠟色(ろいろ)は上塗りを十分に乾燥させた後、油木炭という研ぎ炭で表面を研磨する加工法です。研ぎ跡が残らなくなるまで木目の大きさを違う炭で何度も研いで完全な平面を作ります。摺り漆をしみ込ませて乾燥させた後、菜種油と鹿の角粉(つのご)などをつけて手のひらで磨き上げる事で美しい鏡面に仕上がります。大変な手間と特別な技術が必要とした、最高峰の漆塗り仕上げです。



和塗師ということ

漆器職人や漆芸家を「塗師(ぬし)」といいます。和塗師・宮森昭宏氏は越前漆器発祥の地、河和田を拠点として、伝統と高い技術を生かしながら漆の新しいアプローチに積極的に取り組んでいます。

漆器やメガネフレーム等様々なものに蒔絵を施しながら、漆や柿渋を使用した独自の手法で、住宅の内装や木製キッチン天板の塗装なども請け負っています。

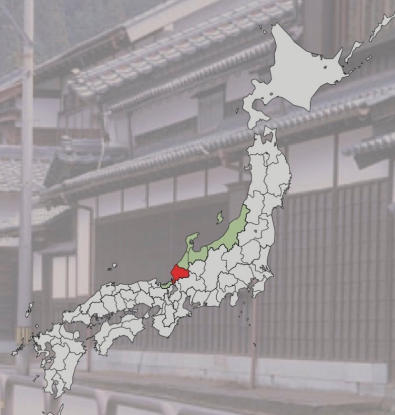
福井で見つけた和モダンエコ / 伝統工芸

越前地方に集まる伝統工芸

福井県内には国の認めた伝統的工芸品が7品目あります。そのうち、越前和紙・越前漆器・越前打刃物・越前焼と、2年前に新たに認定された越前筆筒の合計5品目が集積するこの地域（鯖江市・越前市・越前町）は、歴史と文化に裏付けられたものづくりのまちであると言えます。その「ものづくり」の精神が土台となり、メガネや精密機器、自動車部品など世界に誇る最先端の産業拠点となっています。

豊かな自然と厳しい環境の中で培われてきた技術、季節に寄り添った知恵のある暮らし方は、次世代にいかされるべき大切な知の資源であると考えられます。

日常生活に溢れる暮らしやすさから、幸福度ランキング全国1位の福井を訪ねて、環境と共生したライフスタイルをぜひ一度体験してみてくださいいかがでしょうか…



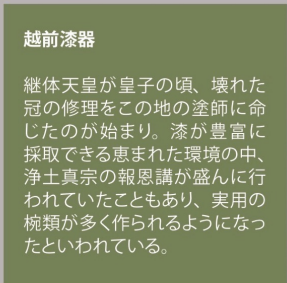
越前和紙

1500年以上の歴史を有し、品質・種類・量ともに、日本一の和紙産地である。全国でも唯一の紙祖神「川上御前」を祀る岡太神社は国の重要文化財に指定されており、春の例祭は「神と紙の祭り」として大いに賑わう。



越前打刃物

700年前、京都の刀匠が越前に移住し、農民の為に鎌を作ったのが始まりといわれている。日本古来の火づくり鍛造技術と手仕上げの手法を守りながら暮らしに密着した生活用具を作り続けている。



越前漆器

継体天皇が皇子の頃、壊れた冠の修理をこの地の塗師に命じたのが始まり。漆が豊富に採取できる恵まれた環境の中、浄土真宗の報恩講が盛んに行われていたこともあり、実用の椀類が多く作られるようになったといわれている。



越前焼

日本の六古窯のひとつ。誕生は約850年前まで遡る。もともと須恵器を焼いていたが、平安時代末期に常滑から焼き締め陶の技術が伝わり継承される。近年、越前陶芸村の周辺に陶芸家が移住して新しい作陶が試みられている。



JAFICAうちエコ研究会のあゆみ

- 2013年 6月 うちエコ研究会 発足
7月 環境省家庭エコ診断推進基盤整備事業
診断員養成研修会 参加
9月 日経リフォーム&インテリアにて診断会開催
2014年 3月 第1回うちエコフォーラム開催(インテリア産業協会にて)
5月 うちエコ診断士7名誕生
8月 うちエコ診断実施機関として認定
11月 JAPATEX WTPに参加
2015年 2月 第2回うちエコフォーラム開催(学生会館にて)
7月 福井研修実施
11月 和モダンインテリアwithうちエコ診断会開催
JAPANTECH WTPに参加

その他 研究会(月1回)、スキルアップ研修等

研究会メンバー(2015.11月現在)

片柳通行(リーダー)／江口恵津子／西直枝／斎藤令子／富田恵子
佐藤友治／中山瑞穂／高尾大介／吉田ジュンコ／横山玲子／賀川吉浩



日本フリーランスインテリアコーディネーター協会
(JAFICA) 事務局

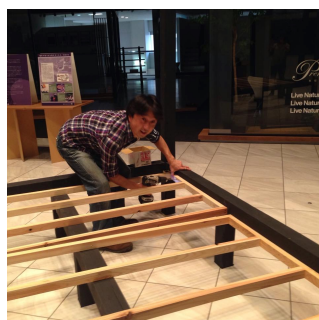
〒107-0062 港区南青山2-2-15 ウィン青山503号
TEL/FAX 03-6804-6299
E-mail info@jafica.org

- 主催 日本フリーランスインテリアコーディネーター協会
共催 リビングデザインセンターOZONE
WTP(ウィンドウトリートメント活性化プロジェクト)
協賛 (株)アサノ不燃木材
(株)ヴェルディッシモ
片柳住設
関西ペイント(株)
コイズミ照明(株)
(株)サンゲツ
(株)杉原商店
ノルディックフォルム
葉奈書道教室
山嘉商店(株)
(五十音順)

◎スケジュール： 11月12日(木)～16日(月) OZONE
 11月18日(水)～20日(金) JAPANTEX2015

JAPANTEXの日程が決まっていたので、搬入・搬出の事を考慮し、OZONEでのイベントスケジュールを調整しました。
 作業工程を含めたスケジュール管理は、ICにとっても重要なスキルであると考えています。

	11(水)	12(木)	13(金)	14(土)	15(日)	16(月)	17(火)	18(水)	19(木)	20(金)	
OZONE	休館日	空間展示 うちエコ診断	→			セミナー	→	開館前			
	設営					借物返却	撤去 搬出				
JAPANTEX2016							↓ 移動	空間展示 うちエコ診断	→		
							搬入 設営			撤去 搬出	



研究会メンバーにより、製作、搬入、設営を行いました。
 JAPANTEXへの移設も、メンバーのみで1日で作業を完了させるという強行スケジュールも、緻密な計算のもと無事に終わらせる事ができました。



事前に現調して、搬入経路の確認やエレベータの寸法、搬入方法や養生の必要性などをチェックしました。
 おかげで当日の作業をスムーズに行う事ができました。



搬入に使用する車両が、ワゴン車1台という事も考慮して、展示物を設計・製作しました。
 作業するメンバーは、ほとんどが女性なので、パーツの重さや大きさにも工夫が必要でした。

◎展示会実施

① LIVING DESIGN CENTER OZONE 6F パークサイドスクエア

11月12日(木) ～ 16日(月)

- ・うちエコ診断 受信者：8名 ・来場者：15名
- ・連動セミナー 参加者：8名

集客の難しさを実感した5日間でした。



OZONE空間展示



うちエコ診断

ICが提案するエコロジカルインテリア
& うちエコ診断について

JAFICAうちエコ研究会
富田恵子

【連動セミナー】
ICが提案するエコロジカルインテリア
& うちエコ診断について

JAFICAうちエコ研究会
富田恵子

以下、来場者の感想の一部です。

- 一般来場者 男性
「ゆとりに興味がある。実際に本物を見てみたい。」
- 一般来場者 女性
「和紙に感動。タペストリーにしたい。」
- OZONE見学御一行様 10数名
「畳の材質が知りたい。これ、和紙なの？」
- 一般来場者 男性
「この和紙はどこで注文できるの？値段はいくら？」
- IC 女性
「吹き抜けから見て気になりました。（和紙に興味）」
- うちエコ診断 受信者 女性
「和紙の作品はどのように作られたのですか？」
「実物の大きさと制作の技術に勉強させていただきました。」
「蚊帳を網戸のように使用するやり方は、機能的でもあり見た目もおしゃれだと思います。」

② JAPANTEX2015 東京ビックサイト WTPブース内 11月18日(水) ～ 20日(金)

・うちエコ診断 受信者 4名 ・来場者：100名以上（計測不能）

イベントは、3日間とも大盛況で、たくさんの方々に「和モダンエコインテリア」について説明させていただくことができました。

急遽お茶会が始まるなどのサプライズもありましたが、美しい空間とエコの共存についての空間展示は、たくさんの方の興味を引いていました。一見何がエコなのか？理解できない方もいらっしゃいましたが、丁寧に説明させていただくと納得していただいたことが印象的でした。



以下、来場者の感想の一部です。

○他ブース出展者（小売業・男性）

「和紙にもいろいろ産地がありますが、越前和紙の魅力に初めて触れることが出来ました。」

○メディア系・女性

「地域の風土による暮らし方の工夫について着目しているところがいいと思います。」

○一般来場者・女性

「季節ごとに建具や敷物を変えるには、収納スペースを考えるとウチでは無理！」

○一般来場者・女性

「アクセントカラーの紫色がとても上品に使われていてよいと思います。」

○一般来場者・中国系 男性

「これ（風神雷神）購入したい。いくらか？」

○インテリアアカデミー代表 女性

「エコをわかりやすく展示されていてとても良いですね。」

○一般来場者・女性

「先人の知恵は素晴らしい。省エネに興味がある。」

○IC・女性

「居心地の良さについて、色々感じるものがあります。」

8. まとめ

今のままでは、地球温暖化に歯止めがかからないという事実が公表されて、真剣に環境問題に取り組まなければいけない時代になってしまいました。人は一度便利な暮らしをしてしまうと、もう後戻りはできなくなります。化石燃料を燃やさなければ、CO2は排出されないのですが、今の暮らしでそれを実践することはとても難しいことだと言えるでしょう。

数十年前までは、各家庭にエアコンなど存在せず、一部の裕福な家庭や公共の建物だけに、その快適な設備が備わっていたことを記憶しております。長い人類の歴史の中で、エネルギーに依存した時代はまだ始まったばかりなのに、あっという間に環境を破壊してしまったのです。エネルギーに依存せず、自然と共生していた時代の方がはるかに長いのです。その長きにわたって、日本の風土に適した環境をその時代の住宅は作ることができていました。多少の我慢はあったと思いますが、それでも日本人は生き続けてこれたのです。

エネルギーによって、快適さを手にしてしまった人類は、箱の中だけを快適にすることを目指しています。残念ながら箱の外のことはほとんど意識していません。

私たちIC(インテリアコーディネーター)は箱の中を作る仕事かもしれませんが、社会的に見てもそれではいけないということに気づきます。つまり、室内空間も、外のこと(地球環境)を意識する必要があるということになるのです。

私たちJAFICAうちエコ研究会は、これまでに美しいインテリアでエコを実現させるという取り組みをしてきました。今回の調査研究では、エネルギーに依存していない先人たちの知恵を探すため「和のインテリア」について学ぶことができました。改めて、日本の住文化に触れてみて、その素晴らしさに感銘を受け、その知恵を現代にあった形で表現する方法を確立することができたと考えております。この研究が、今後の日本の住宅が地球環境に負担のかからないものになっていく何かのヒントになってもらえれば幸いです。

JAFICAうちエコ研究会 一同